第 15 回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会

日時：令和６年１月 22 日（月）
18 時 00 分～19 時 00 分
会場：長野県伊那合同庁舎　講堂

次 第

１ 開　会

２ 挨　拶

３ 会議事項

（１）第 14 回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ 【資料１、２】

（２）校地選定の結果報告について 【　資料３　】

４ その他

次回（第 16 回）の予定

【日時】　令和６年２月 13 日（火）　18：00～19：30

【会場】　長野県伊那合同庁舎　講堂

【内容】　再編実施基本計画（案）ついての意見交換

５ 閉　会

上伊那総合技術新校「新校再編実施計画懇話会」構成員

○印：令和６年１月からの構成員

	区分	氏名	所属等	役職等
1	自治体	山田　勝己	辰野町	副町長
2		浦野　邦衛	箕輪町	副町長
3		田中　俊彦	南箕輪村	副村長
4		小平　　操	駒ヶ根市	副市長
5		笠原　千俊	伊那市教育委員会	教育長
6		加藤　孝志	宮田村教育委員会	教育長
7		唐澤　直樹	上伊那広域連合	事務局長
8	産業界	松井夕起子	辰野町商工会	代表
9		漆戸　豊徳	箕輪町商工会	代表
10		堀井　一政	南箕輪村商工会	工業部会長
11		山下　政隆	駒ヶ根商工会議所	副会頭
12		向山　賢悟	伊那商工会議所	副会頭
13	同窓会	篠平　良平	辰野高等学校同窓会	会長
14		小河　節郎	箕輪進修高等学校同窓会	会長
15		清水　　満	上伊那農業高等学校同窓会	会長
16		鈴木　正志	駒ケ根工業高等学校同窓会	会長
17	ＰＴＡ	矢澤　弥彦	辰野高等学校ＰＴＡ	副会長
18		城取　　誠	箕輪進修高等学校ＰＴＡ	会長
19		大澤あまな	上伊那農業高等学校ＰＴＡ	副会長
20		宮下　陽子	駒ケ根工業高等学校ＰＴＡ	副会長
21	学校関係者	有賀　泰司	上伊那中学校長会（東部中学校長）	副会長
22		島尻理惠子	上伊那小学校長会（中沢小学校長）	副会長
23		原　　潤	伊那養護学校	校長
24	学識経験者	松島　憲一	国立大学法人信州大学農学部	教授
25		武久　泰夫	南信工科短期大学校	副校長
26	地域	布山　　澄	上伊那地域振興局	局長
27	統合対象校関係者	茶城　啓二	辰野高等学校	校長
28		小林　敏明	箕輪進修高等学校	校長
29		平沢　　一	上伊那農業高等学校	校長
30		福澤　竜彦	駒ケ根工業高等学校	校長
31		○宮澤　奨英	辰野高等学校	生徒会副会長
32		松山　吹希	箕輪進修高等学校	生徒会副会長
33		○根津　柚希	上伊那農業高等学校	生徒会長
34		○小山　将幸	駒ケ根工業高等学校	生徒会長

【事務局】

学校名	氏名（役職等）
辰　　野	齋藤　美幸（教頭）　藤森　和浩　丸山　末広
箕　輪　進　修	岩田今朝宣（教頭）　田中　俊生
上　伊　那　農　業	塩原　慎一（教頭）　境　　久雄　山下　昌秀　若林　誠司
駒　ケ　根　工　業	藤田　晶子（教頭）　竹内　浩一　甕　　力　和田　和代

	氏名	所属等	役職等
県教育委員会	中島　秀明	高校教育課　高校再編推進室	主幹指導主事
	田中　　聡	高校教育課　高校再編推進室	主任指導主事
	原　多恵子	高校教育課　高校再編推進室	主任指導主事

資料１

第 14 回　上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ（案）

日時・会場	令和５年（2023 年）11 月 20 日　18 時 00 分～19 時 30 分　長野県伊那合同庁舎　講堂
出欠席	懇話会構成員：出席者 25 名、欠席者９名 （欠席者：山田勝己、堀井一政、向山賢悟、城取　誠、宮下陽子、伊藤七海、松山吹希 飯塚咲絵、平澤晃洋（敬称略）） 事務局：県教委２名（中島主幹指導主事、田中主任指導主事） 辰野高校３名、箕輪進修高校２名、上伊那農業高校３名、駒ヶ根工業高校３名
傍聴者	傍聴９名、報道６社（オンライン含む）
会議事項	（１）第 13 回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ（２）校地検討会議からの報告 （３）意見交換
当日資料	第 14 回懇話会（資料）、意見交換シート

主な内容（・意見及び発言等、◎座長のまとめ）

（１）第 13 回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ

○前回懇話会での意見交換の主な意見・発言の確認。グループ討議で出された意見の確認。

○新校の募集学級数および開校年度の考え方については、次回以降の検討内容とする。

（２）校地検討会議の報告

○「学びのイメージ」が固まったことを受け、15 の検討項目について校地検討会議で出された意見をまとめた（資料２）。まとめを基に、校地選定の際の参考意見となるように懇話会からご意見をいただきたい。

（３）意見交換

○校地・校舎に係る環境

・３科の学びの連携のイメージを重要にして欲しい。そのためには敷地は広い方が良い。
・上伊那地域の中心、農業実習地、実習棟建設のための広さとして考えると校地としては上伊那農業高校が望ましい。
・駒ケ根工業高校も充分に広く、客土という方法を考えると、不可能ではない。
・３科が一緒になることで、朝晩の実習や騒音や匂いなど、今後新たに配慮していかないといけない面が出てくる。
・公共交通機関の充実や部活動充実などに期待する。

○通学環境

・どちらの校地になっても交通の便は良い。
・「駅からの近さ」は長短あるが、上伊那全域からの通学を考えると伊那は中心であり、駒ヶ根は南寄りである。
・どちらの学校にも通学に徒歩で１時間という生徒が存在しており、それを解消する方法も考えるべきである。
・通学環境として歩道が挙げられているが、街灯の設置状況等の安全面も必要。
・中学生から見ると、明確な進学の目的があれば距離は関係ない。魅力ある学校づくりが必要である。

○学校を取りまく環境

・連携先として想定される信州大学農学部や南信工科短大との距離関係を考えると、伊那の位置は良い。
・地域産業の担い手の育成のため、それぞれの地域でサポートして貰っている。統合してもサポートの継続を。
・同窓会としても協力体制が取れるよう、活動の拠点となる場所の確保を。
・地域との連携は校地の場所というよりも、上伊那広域連合等コーディネーターとの関わりが重要となる。
・伊那養護学校と上伊那農業高校で交流しインクルーシブについて理解が進んだ。交流継続には近い場所が望ましい。

○その他

・他地区とのバランスを考えると、諏訪・下伊那の工業科の中間は駒ヶ根である。駒ヶ根は工業が産業の中心である。
・工業は上伊那全域で活発であり、農業・商業についても同様である。上伊那全体で見たときに中心は伊那である。
・赤穂総合学科新校と上伊那総合技術新校それぞれの商業の学びを考えると、伊那の方が望ましいのでは。
・伊那だと周辺に学校が集中することになる。上伊那全体のバランスも考慮すべきである。
・施設・設備はともに老朽化が著しく、地域の期待に応えられるよう新校に期待する。
・上伊那に限らず、県外等も含め移住を希望する子ども達が伊那谷で高校生活を送れるような学校づくりに期待する。

◎校地検討会議から提出された「校地選定に関する意見のまとめ」が懇話会において了承を得られたので、県教育委員会は懇話会で出された意見も参考にして校地の選定を始めてほしい。

その他

【次回】　日時：未定、　場所：未定、　内容：未定

資料２

第 14 回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会（R５.11.20）グループ討議記録

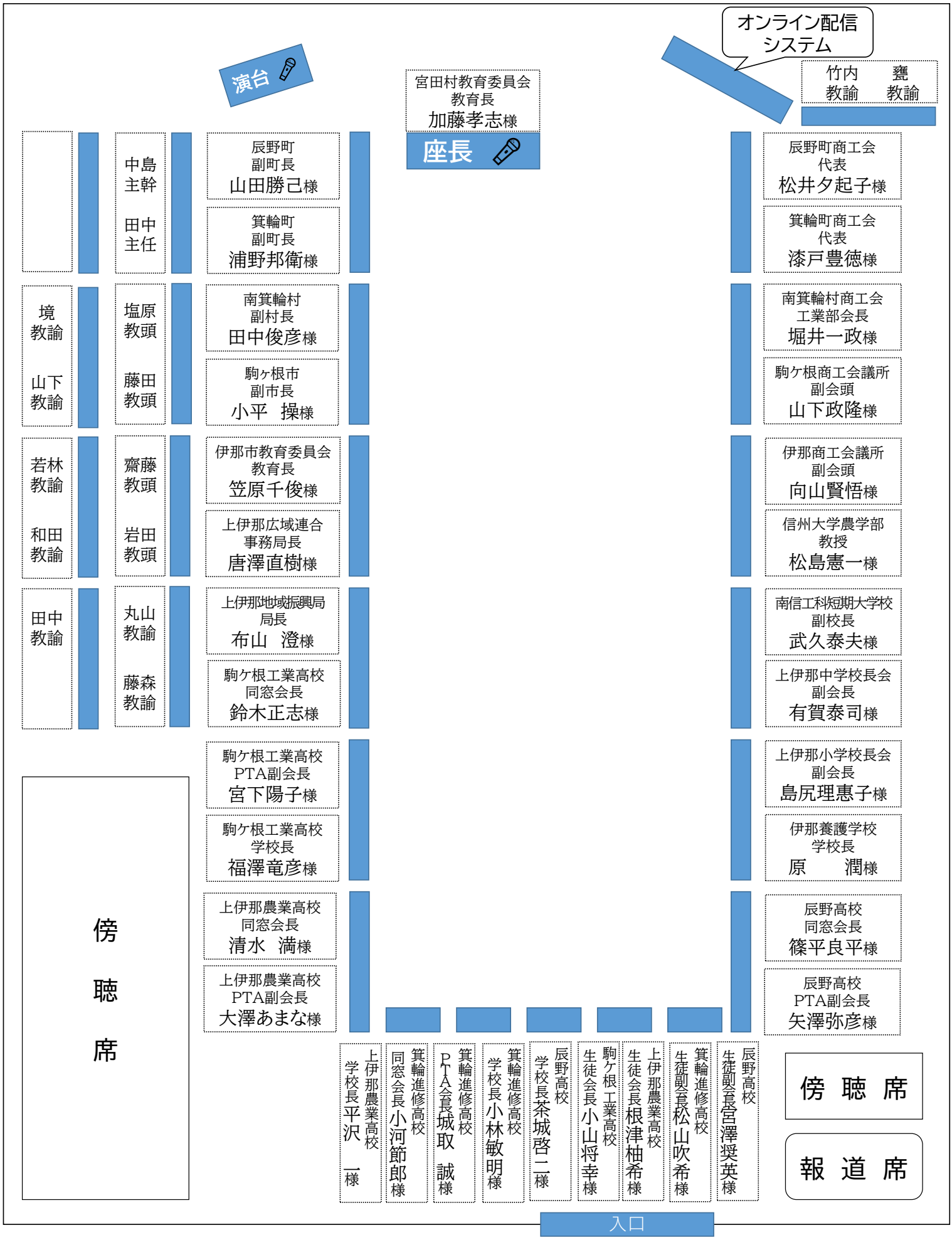
○「校地選定に関する意見交換のまとめ」について　（意見交換シート記述も含む）

グループで出た意見	
A	・校地検討会議の構成員、甲乙つけがたい。その中で違いを精査し、決定をしていくことが必要 ・「駅からの近さ」では、駒工 13 分、上農 28 分となっている ・「敷地」に関して、農業実習に関しては、土地の土壌を考えて、上農 ・「他地区との高校配置のバランス」は、岡工との距離関係から駒工はありえる ・農地については、駒工内に土壌改良により可能。駒ヶ根市内は、もともと工業中心であるので駒工が適切である ・上農の位置は、上伊那のなかでバランスが取れている状況である ・生徒の通学において地域内におけるバランスを考えた時、上農の位置は上伊那の中心に近く良い ・地域の中心はどこか。難しい問題ではあるが、遠くから１時間以上の生徒がいる中で、遠くにならない要望あり、そうなることが望ましい。地域内の中心の上農の位置が良い ・総合技術新校は工業、農業、商業の各々の学びがあるなかで、校地候補から辰野、箕輪進修は早々にはずれている。観点の違いはあるけれども、農地に適した土壌と、「上伊那全体からの通学のしやすさ」を考慮した場合、上農の位置が良い ・赤穂高校の総合学科の商業の学びと、上伊那総合技術新校の商業科の関係で考えれば、上農の位置に商業科の配置を考えた方が良い。また箕輪進修の工業科の事を考えても、上農の位置に工業科があることが良い ・「上伊那農業高校　駒ケ根工業高校　校地・学校の現況」資料にあるように、とにかく施設・設備の老朽化が著しい。それがリニューアルされる期待感を持てる（期待したい） ・農業、工業、商業ともに施設・設備をリニューアルし、生徒により望ましい教育環境ができることを期待したい ・これを機会にして、上伊那地域の皆の期待に応えられる新校の学校づくりを目指して欲しい。 ・古い校舎・施設が現状。新校を創ることにより、校舎・施設を新しくし、今日的な学びができる体制をつくって欲しい。予算を十分使って欲しい ・諏訪、下諏訪、上伊那地域でのバランスを考えれば駒ヶ根が妥当だと考えます ・校地の総面積において、上農の方が広く、かつ隣接して農地を有している。駒工の校地に新たに農地を持つことは難しいと考えるので上農の校地を新校の校地とすべきではないか ・上農の校地は信大農学部や南信工科短大とも近く農業や工業との専門分野でも連携した取り組みが期待できる ・上農は上伊那の中心に近い位置であり、通学面でも利便性が高い ・伊那北から伊那市駅の新たなまちづくりに高校生がかかわれることを考えると上農の校地が適切である ・上農と駒工の比較ですが、生徒の通学環境を考えると、最寄り駅は、上農より駒工の方が近くなるが、上伊那全体から見ると、駒工は南に寄り過ぎの感がある ・敷地面積から考えると、上農の方が、中の原農場を除いても、広く余裕がある ・近隣の学校外施設の状況は、上農と駒工を比較すると、大きな相違は感じない ・重要なことは新校のカリキュラム。農業・商業・工業の学科を勘案すると農地・農場の確保は重要である ・仮に、駒工を校地とした場合、現在の上農にある規模の農場を駒工の近隣に確保することは難しいと思う。逆に、上農を校地とした場合、農場は確保できており、また、商業、工業の校舎を新設するにしても、校地に余裕があり、可能と考えられる

資料２

A	・校地検討委員会でまとめた主な意見の中で、特に重要だと考えているのは以下の点です １．上伊那全域からの通いやすさ。出来るだけ上伊那の中心にあってほしい ２．農地（実習他）の確保・コスト。広大な農地を新たに作るコスト等を考えると現在の農地を継続利用することが現実的である 他の点ではそれぞれ一長一短があるが、この２点は大きな観点と考えている
B	・土壌づくりでは、客土という方法も校地検討会議では出たが、表記していない（議事録に記録はある） ・敷地の広さは大きな条件であると考える ・新学習指導要領でも、「地域」がキーワードになっており、地域や大学等との連携が重要である点を踏まえると自ずと校地が見えてくるのでないかと考える ・通学環境として歩道が挙げられているが、街灯の設置状況はどうなのか。 ・お互いの学校に配慮した全体的にどちらも遜色ない項目が多いが、マイナス面ではなくプラス面を強調する方向性のまとめの方が判断材料としては適切ではないか
C	・農地のことを考えると、土壌開発がいらない上農が適している。土壌開発のために開校時期が遅れることが不安 ・上農は駅から遠いか ・同窓会で常駐し学校活動の補助をしている。同窓会活動の拠点を確保 ・同窓会館は共有スペースとして様々な活動ができる ・辰野・駒ヶ根・箕輪・伊那、それぞれの地域でサポートしていただいている。新校になっても是非引き続きできるように ・色々な地域の方が関わってくれる夢のある学校を ・車よけのポールや交差点などの安全確保 ・公共交通機関の充実 ・部活動が十分できる環境 ・校地がどこになろうと現在と同等以上の協力が企業・商工会から受けられるよう上伊那全体で学校を支えられることが大切です。活動ができる部屋があるとよい ・同窓会活動も協力体制が取れるように ・農地を新規に開墾となると、埋蔵物等の調査に時間と費用が発生する。仮に埋蔵物が出た際の対応も必要 ・屋内で行う部活動にもスペースが必要 ・課外活動で地域との今後の連携（上伊那全体でフォロー） ・同窓会は学校によって違いはあるが、生徒の活動への協力・支援を行っている。十分、同窓会活動ができるように拠点の確保が望ましい ・総合技術新校は上伊那地域産業の担い手育成が期待できる。貴重な人材が流出するのは防ぎたい ・伊那養護学校から近い上農との交流の中で、伊那養護学校の生徒も楽しく上農の生徒と触れ合い、上農の生徒も伊那養護学校の生徒との関わりから共生社会に向けての学びを深めることが多くあったと聞いている。現在、中の原分教室も上農内にあり、伊那養護学校から近い校地であると、新校の生徒はこれからの多種・多様を大切にする社会に向け、伊那養護学校の生徒との交流から多くの学びが期待できると考える
D	・交通の便利さ（遠くから通う生徒のための横のラインの通学路が有効では） ・ゆとりある教育環境を（農工商）を整えるには広い敷地は必要 ・伊那谷に移住する家族やその子どもたちにも魅力ある高校づくりを ・大学との連携は距離が離れていてもできるのでは ・新校の目指す農工商の連携と言う学びのイメージを大切にすることが重要

資料２

E	・「資料２　まとめ」のとおり、お願いします ・南信工科短期大学校との連携のしやすさだと上農がありがたい ・連携企業の候補、協力してくれる団体も挙げてほしい。→今まで協力してもらえるところは継続を検討してほしい ・連携面ではどちらも差はない ・まちづくりは現在の状況として問題ないという認識 ・校地検討とは関係ないが、これから校地検討会議で話題になった事等は説明する必要がある。 ・「協力体制…企業　行政…学校関係」はわかるが、郷土愛プロジェクトのコーディネーターのように、コーディネーターにかかわってもらうことが大事。高校にコーディネーターが必要になるのでは ・上伊那広域連合（郷土愛プロジェクト）の安積先生のようなコーディネーターが必要 ・校地のみならず学びの充実、それを支えるコーディネーターが必要 ・地域コーディネーターにも早い段階でかかわってもらうべき ・南信工科短大　両校とのコラボの強化。距離感で言えば近いから上農の校地が良い ・上農の畜産（牛）のにおい（10 数頭）。臭い広がらないよう工夫している。消臭機能を設置するなどは必要 ・畜産の問題（特に臭気）は心配ない ・地域との連携　利便性 ・具体的企業等との関係を教えてほしい ・現在の各校の地域との連携は継続できるようにしてほしい

第15回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会　会場配置図（席図）2024.1.22